

# ひょうごの医療

シリーズ39

生殖補助医療②

無精子症へ上

不妊症に悩む夫婦のうち、約半数は男性にも原因がある。男性不妊症の原因はさまざま、精子をつくる機能に障害がある「造精機能障害」には、精液に精子が確認できない「無精子症」▽精子が乏しい「少精子症」▽精子の運動している率が低い「精子無力症」などがある。無精子症はおよそ100人に1人ともいわれ、「閉塞性」と非閉塞性に分類される。

閉塞性は精子の通り道に障害があり、通り道の再建手術をすれば改善する可能性がある。無精子症の多くを占める非閉塞性は改善が難しく、自然妊娠は不可能とされる。

■告知に衝撃  
神戸市内に住む水谷康夫さん(仮名)48、妻陽子(38)さん(同)は2010年に結婚したが、1年を過ぎて自らには妊娠しなかった。親戚

から「子どもを早くつくってほしい」といわれ、陽子さんは「不妊は私が原因」と思いつめた。対応法を聞くために兵庫医科大学(西宮市)を受診し、12年ごろから本格的に不妊治療を始めた。当初は基礎体温などを参考に排卵日を予測し、その日に合わせて夫婦生活を持つ「タイミング療法」を続けたが、それでも妊娠しなかった。

兵庫医科大学では、女性対象の産科婦人科と、男性対象の泌尿器科が連携する「生殖医療センター」がある。水谷さん夫婦を診察してきた柴原浩章センター長(56)は「不妊は夫婦のどちらにも原因があるから分からないので、産科婦人科と泌尿器科の密接な連携、協力不可欠」と話す。

陽子さんは産科婦人科で卵管を調べるなどしたが異常をみない。水谷さんは2回の検査で無精子症と診断された。自分が不妊の原因だと知り「正直ショックでした」。



無精子症について説明する兵庫医科大学病院生殖医療センターの柴原浩章センター長(西宮市武庫川町)

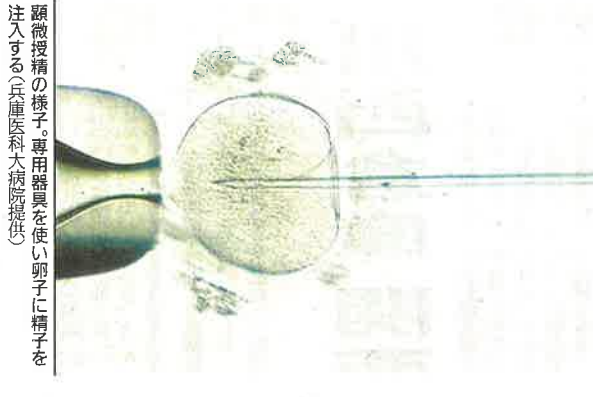
同病院はさらに、精巣の大きさ▽精子をつくる量を示すホルモンの量▽過去に精液に精子が存在したかどうかなどを総合的に検査し、水谷さんの精巣には精子が存在する可能性が高いと判断。精巣にある精細管を切り取り、精子を採取する手術が選択肢としてあることを伝えた。手術をして初めて精子があるかどうか分かるので、採取が確定ではない点も説明した。

精巣から精子を採取する手術は保険の適用外で、医療機関によって20万円〜50万円台とばらつきがあるという。

■待望の妊娠  
水谷さんは「初めての外科手術なので不安はあったが、子どもがほしかったので受け入れることを決めた」と振り返る。手術は13年末に実施し、顕微鏡を使って精巣内を探した。結果は精子が見つかり、水谷さんは胸をなで下ろした。手術の副作用として考えられる精巣の萎縮や男性ホルモン量の低下はない。痛みもなく、半年くらいは手術跡が気にならなってきた。水谷さんは「元気に生まれてきてほしい」と夫婦はうなずき合っていた。

ご意見、ご感想をお寄せください

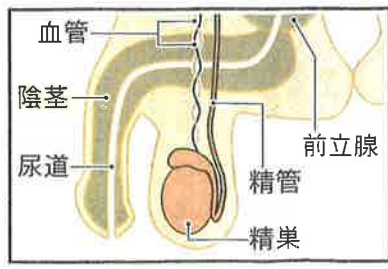
## 精液に精子が存在しない 精巣から採取する手術も



### 不妊の約半数は男性に原因

精液検査 世界保健機関(WHO)が2010年に発表した精液検査の基準値では、精液量1.5ml未満、精液濃度は1ml当たり150万個未満、運動している精子の率は40%未満などを造精機能障害としている。2回以上続けて異常値が出れば、画像検査などの精密検査を経て、確定診断される。

男性不妊症 WHOが1996年に発表した統計によると、不妊症のうち女性側に原因があるのは41%、男性側が24%、両方に原因があるのは24%、残り11%は不明。男性に何らかの原因があるのは計48%と、ほぼ半数に達している。



精巣とその周辺の図

应用中を目指したいとする。また、女性向け診断機器の研究開発も計画。女性から卵子を採取する前に、卵巣内のどの部分にだけ卵子があるかを、超音波で調べられるようにしたいという。

兵庫医科大学病院生殖医療センターの柴原浩章センター長によると、近年は血液検査で特定の遺伝子の異常を調べ、精巣に精子が存在する可能性を見極めてから採取手術を行う方法も、一部の医療機関で行われている。また十分に普及しておらず、健康保険の適用外だが、患者が希望し、病状などの条件が合えば、兵庫医科大学病院でも検査が可能という。

## 診断機器開発で「医工連携」

兵庫医科大学の研究グループが、医療機関と協力し、男性不妊症の診断機器の開発を進めている。工学系の技術を医療とつなぐ「医工連携」の一環。研究は2010年ごろから本格化しており、実用化を目指している。

県立天実用化へ特許申請中

兵庫医科大学の研究グループが、精子が見つかる可能性を超音波で診断する手法を開発している。工学系の技術を医療とつなぐ「医工連携」の一環。研究は2010年ごろから本格化しており、実用化を目指している。

県立天実用化へ特許申請中

兵庫医科大学の研究グループが、精子が見つかる可能性を超音波で診断する手法を開発している。工学系の技術を医療とつなぐ「医工連携」の一環。研究は2010年ごろから本格化しており、実用化を目指している。



男女の不妊診断機器開発について語る兵庫医科大学病院生殖医療センターの榎田浩章センター長

## 進む男性不妊の治療支援 県が専門相談窓口開設

不妊に悩む夫婦は10組に1組程度いるとみられるが「不妊は女性の問題」と考えがちで、男性不妊症に対する認知は進んでいない。このため自治体は相談体制の拡充などに力を入れている。

兵庫県は本年度、泌尿器科医による男性専門の不妊相談窓口を設け、6月から相談を受け付ける。県が開設している従来の相談窓口には、男性からの不妊相談がほとんどなかったため、男性不妊症の啓発も進める。担当者は「不妊に関するセミナーなどを通じて広く知ってもらい、受診や治療につなげたい」とする。

面接相談で、1人1時間程度を想定。会場は神戸市内で、毎月第1水曜日の午後2〜5時(祝日、年末年始は休み)。無料。相談日の5日前までに要予約(窓口☎078・362・3250)。

一方、県は本年度、保険が適用されない「特定不妊治療」を受ける夫婦への国の助成制度に対し、独自の上乗せを始めた。助成対象には、精巣から精子を採取する手術など男性側の治療も含まれる。県の上乗せ分は、政令・中核市(神戸、姫路、西宮、尼崎)は対象外となる。兵庫医科大学病院の柴原浩章センター長は「少子化対策の必要性が叫ば

この面の記事は金井恒幸が担当しました。次回の16日は「出生前診断」です。「無精子症へ上」は23日に掲載します。(奇数月の第4土曜掲載)